ナデジタ・パヴロバ（1905–1982)

鎌倉のバレエ文化に尽くしたひと

1919(Ｔ8)年 ナデジタ・パヴロバは母ナタリア、姉エリアナと共にロシア革命を逃れて日本に亡命した。母はロシアの貴族の家に生まれ歌手だった。生計を得るために、横浜を中心にエリアナがダンス教師やバレエの公演活動を始め、ナデジタも参加した。

左：ナデジタ　中央：母ナタリア　右：姉エリアナ

インドの夜を踊るナデジタ

1923 年 9 月 1 日の関東大震に遭遇し、ナデジタは左足を負傷した。一家は神戸に避難し、翌年欧州に向けて出発したが、途中の上海に滞在した。

1925 年 日本の友人たちの熱心な呼びかけに応じたエリアナが単身日本に戻り、後援者澤静子の鎌倉材木座の別荘に居住し活動を再開した。翌年ナデジタと母も再来日し、エリアナに合流した。

1927(Ｓ2)年 エリアナが鎌倉七里ヶ浜に小規模の住宅兼スタジオを建てバレエスクール開始する。以後、エリアナの奮闘で建物の規模を拡げ、バレエ公演のために全国を巡業し日本人に馴染みのなかったバレエを普及させた。

七里ヶ浜のパヴロバ・バレエスクール兼住宅 1986(S61)年取り壊された

1937 年 パヴロバ一家は日本に帰化し、ナデジタの日本名は霧島撫子となった。潤光学園の久野タマはエリアナを体育教師(バレエ)に迎えていたが、その仕事をナデジタが引継ぎ生活も軌道に乗り出した。一方、世の中は戦時色を強めていった。

1941 年 エリアナは軍属として中支軍慰問団に参加し、現地で病に侵され南京の陸軍病院で病死、享年 44 歳だった。

一家の柱エリアナを失ったナデジタと母は戦時下を、近隣の人々や友人の支援を受けながらも、特高の監視に苦しみ、生徒の激減による経済的困窮、健康不安,エリアナの弟子の離反の中で耐え抜いた。

1944 年 ナデジタはパヴロバ舞踊研究所を引継ぐことの挨拶状を関係者に発送した。

戦後、パヴロバ・バレエスクールに子供たちが帰ってきた。新しい時代の幕開けに鎌倉の多くの師弟が西洋舞踊のバレエに興味と関心を持ち入会者が増加した。助教師も育ち、ナデジタは弟子の指導とバレエの育成に情熱を注いだ。

1950(Ｓ25)年「市民座」のこけら落としにナデジタは「インドの夜」を野口力子と踊った。

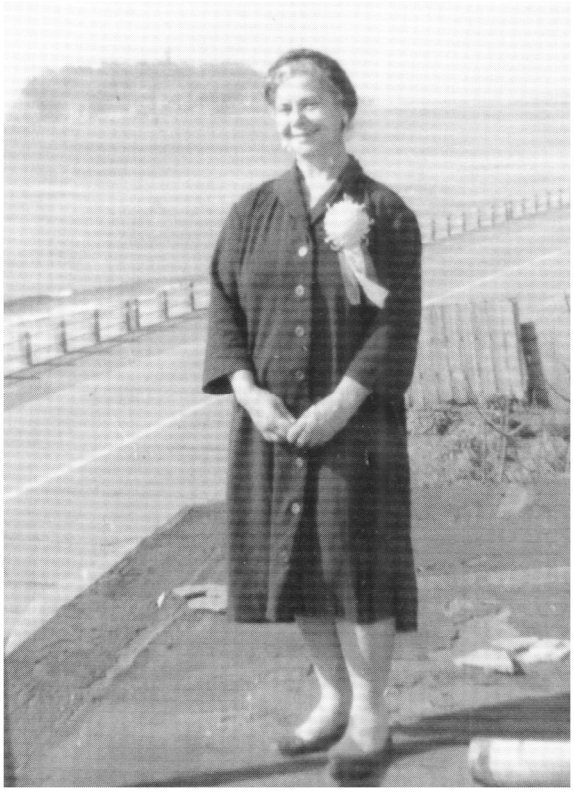
1957 年 前年に母ナタリアが死去した悲しみを乗り越えて、念願だった「故エリアナ・パヴロバ 17 回忌追悼舞踊公演」を秩父宮体育館に於いて主催し、大勢の人々が参加した。

エリアナ 17 回忌で挨拶するナデジタ　於：秩父宮体育館

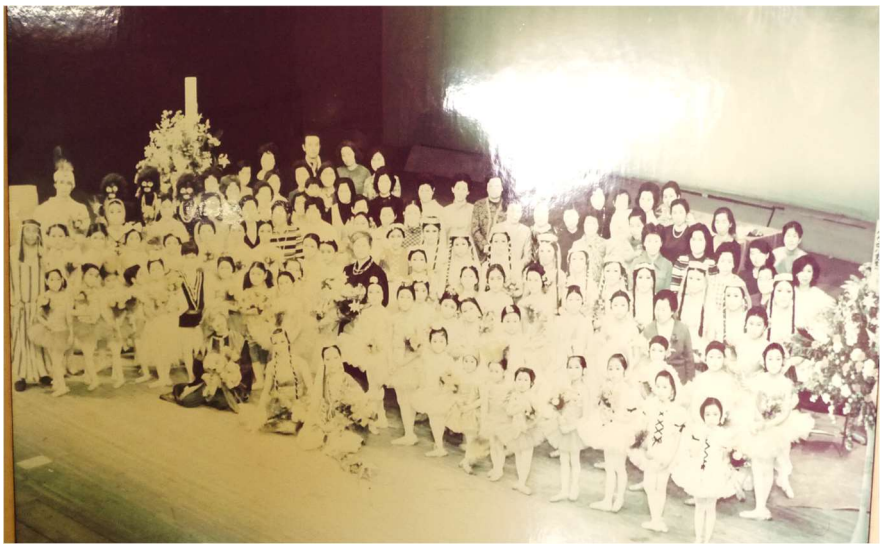
脚の不自由さを感じさせない気品あるマイムで観客を魅了し、笑顔とユーモアを以て子供たちの指導を続けた。

パヴロバ・バレエスクールから多くの舞踊家が巣立ち、鎌倉のバレエ文化に尽力した功績により、1961(S36)年 神奈川文化賞を受賞した。1972 年の市制記念日に市政功者の表彰も受けた。

1982 年の鎌倉市文化祭合同バレエ公演を最後に、皮膚癌により死去、享年 77 歳だった。今は横浜外人墓地に姉と母と共に眠る。



神奈川文化賞受賞直後 1961(昭和 36)年



パヴロバ･バレエスクールの発表会鎌倉中央公民館（昭和 47 年頃）

日本バレエ育ての親

パブロバさん死去

わが国のバレエを育てたナデジダ・パブロバさんが、十六日午後一時二十三分、皮膚がんのため、横浜市戸塚区原宿町の国立横浜病院で亡くなった。七十八歳だった。葬儀式は十七日午後一時から、東京都千代田区神田駿河台四ノ一、日本ハリストス正教会教団で。自宅は神奈川県鎌倉市七里ガ浜一ノ三ノ三。喪主はいない。

ナデジダさんは大正九年（一九二〇）、革命ロシアをのがれ、母ナタリヤさん、姉エリアさんとともに日本に来た。三人で神戸、横浜でバレエを教える一方、日本各地で公演をし、わが国にバレエを広めた。昭和三年には鎌倉市七里ガ浜に「パブロバ・バレエスクール」を開設、指導にあたった。姉エリアさんは昭和十六年三月、旧日本軍慰問に出かけた中国大陸で、伝染病にかかり急死、その後母も死亡、ナデジダさんが一人で指導をしてきた。

パブロバ一家の門下生には故人の橋秋子や東勇作、現在、日本バレエ協会会長の服部智恵子や、貝谷八百子、島田広各氏らわが国バレエ界のそうそうたるメンバーがいる。姉妹は生涯を独身で通し、ただ一人残されたナデジダさんは身寄りがなく、鎌倉で一人で生活していた。昨年七月末から入院していた。

ナデジタの訃報記事　朝日新聞全国版 1982(昭和 57)年 12 月 17 日